



天文学史跡めぐり【2】

四国・九州地方の天文学史跡めぐり

松村 巧 (山口県下松市)

松尾 厚 (山口県立山口博物館)

1. はじめに

1月号の中国地方編に続き、天文学史跡めぐりの四国・九州編をお届けする。当初は筆者の住む中国地方の天文学史跡だけでも紹介したいと思っていたが、編集部とも相談し、隔号で全国の史跡を紹介することにした。9月号では関西・東海地方の史跡を紹介する予定である。

中国地方編と同様に、ここで紹介している史跡については、文献調査、関係者への問い合わせによる調査の他、高知県の片岡直次郎の観測所跡(鎮ヶ森頂上)、在所隕石落下地点の碑、愛媛県の大法寺の天測記念碑、長崎県の伊能忠敬天測之地の碑、鹿児島県の伊能の碑を除き、筆者が現地に出向いている。天文とは直接関係のない部分もあるが、伊能忠敬関連の史跡についても紹介した。

なお、沖縄県については本誌2001年7月号に、北尾浩一氏の記事があるので割愛している。[1]

2. 香川県

(1)久米通賢翁銅像 (坂出市常盤町 2-1-75、塩釜(塩竈)神社境内)

久米栄左衛門通賢(1780-1841)は、大阪の天文暦学者間重富の門弟の一人で、文化3年(1806)、26歳で高松藩内の沿岸測量を行っている。文化5年(1808)、伊能忠敬が四国測量で讃岐に来ると案内役を務め、文化6年(1809)、高松藩天文測量御用となった。

昭和9年(1934)12月11日、坂出市寿町の旧塩釜神社境内に久米通賢の銅像が建立されたが、昭和18年(1943)、太平洋戦争中の金属回

収により供出された。このため昭和30年代に入って、地元の有志により、聖通寺山中腹の塩釜神社境内に通賢の銅像が再建された。銅像は高さ2.5mほどで、望遠鏡を手にしている(図1)。

鎌田共済会郷土博物館(坂出市本町1-1-24)には、久米栄左衛門の遺品が展示してある。[2],[3]

(2)国分寺隕石落下記念像(綾歌郡国分寺町新居 1131、国分寺町立国分寺中学校内)

昭和61年(1986)7月29日の夕方、国分寺町と坂出市の一部に隕石が分裂落下した。国内では明治42年(1909)7月24日に岐阜県美濃市、関市一帯に落下した美濃隕石以来、77年ぶりの大隕石雨となった。

この隕石落下記念像は国分寺中学校正面玄関の脇にあり、ほぼ等身大の、空を見上げている人の石像が3体並んで立っている。傍らには、国分寺隕石の調査にあたった国立科学博物館(当時)の村山定男氏による、「国分寺

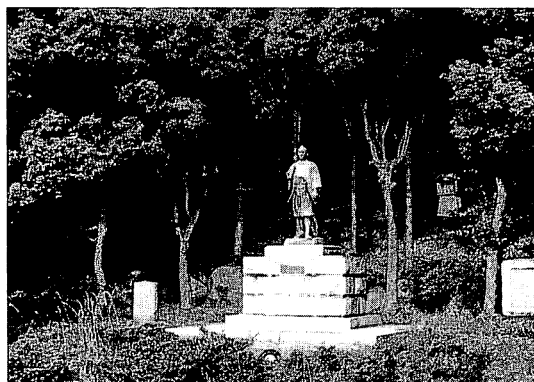


図1 久米通賢翁銅像

隕石落下記念「星が来たんだ」と刻まれた石板が置かれている。[4]、[5]

### 3. 高知県

#### (1)高知城の正午計（高知市丸の内、高知城天守閣前）

高知城の天守閣入口脇の芝生の中に正午計と呼ばれる石造りの平面日時計がある（図2）。この正午計（現地の解説板には日時計と記されている）には時刻目盛が無く、長さ90cm、幅53cmほどの石板に、1本の南北線が刻まれているだけである。この正午計は石の風化の様子から約200年前のものだとする説もあるが、史料が発見されておらず、詳しいことは分かっていない。

正午計がどのような目的で使用されたかは不明であるが、和時計の時刻あわせに使用したのではないかと考えられている。[6]、[7]

#### (2)片岡直次郎の観測所跡（高岡郡葉山村永野鎮ヶ森頂上および葉山村役場付近）

片岡直次郎（号春峰、通称蔵之（1747-1781）<sup>かわたにけいざん</sup>）は、葉山村永野に生まれ、高知の川谷蘆山について天文暦学を学び、安永年間には大阪の麻田剛立に入門した。彼は、葉山村永野の鎮ヶ森山頂（標高200m）と、現在の葉山村役場付近に天体観測所を設置して観測を行っている。



図2 高知城の正午計

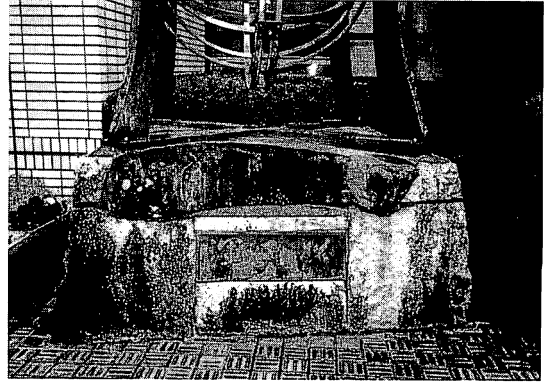


図3 葉山村役場の渾天儀の台石。渾天儀のモニュメントを載せるために作られた新しい台石であるが、上部に当時の台石が埋め込まれている（黒っぽく写っている部分）。

現在、観測所跡の鎮ヶ森頂上には「明和三年測天台春峰蔵之造」と刻まれた石（測天台碑）が残されている。

役場前の観測所には、渾天儀、圭表、象限儀等の測定器を据えて観測したと言われる。現在は渾天儀の台石と思われる大きな石だけが残り、石には「明和壬辰春峯造」と刻まれている（明和壬辰は、明和9年(1772)）。昭和59年(1984)3月、役場の新庁舎の落成を機に、この台石の上に直径1.2mの渾天儀のモニュメントが作られ、役場の玄関脇に置かれている。（図3）。[8]、[9]、[10]

#### (3)谷秦山邸跡の碑（香美郡土佐山田町秦山町

3-1）  
たにじんざん

谷秦山(1663-1718)は、土佐長岡郡豊岡村（現・南国市）出身の国学者、天文暦学者で、元禄13年(1700)に現在の土佐山田町に転居している。天文暦学については初め渋川春海に文通をもって学び、宝永元年(1704)、江戸に出て春海を訪ね、直接教えを受けた。著書にじんぎろくがある。

谷秦山邸跡（土佐山田町指定史跡）は、秦山町3丁目の住宅地の一角にあり、そこに昭和12年に建立された四角柱状の石碑がある

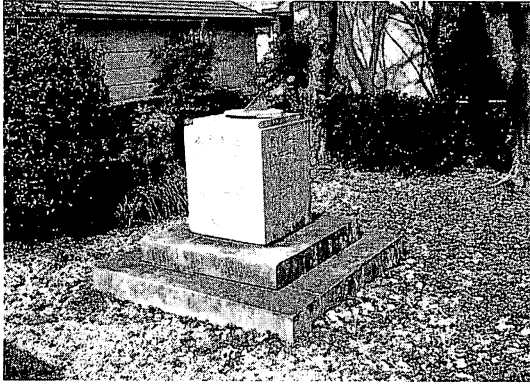


図4 谷秦山邸跡の碑

(図4)。石碑は、高さ90cm、縦横ともに60cmほどの大きさで、碑面には「北辰出地三三度」(北緯33度のこと)で始まる秦山の漢詩などが刻まれている。碑の上面には青銅製の日時計が置かれ、それには谷秦山先生邸趾と記されている。

谷秦山の墓は土佐山田町ぐいみ谷、町営スタジアム北方100mのところであり、周辺は秦山公園として整備されている。[11]、[12]

(4)在所隕石落下地の碑(香美郡香北町朴ノ木)

在所隕石は明治31年(1898)2月1日午前5時頃、高知県在所村朴ノ木(現・高知県香美郡香北町朴ノ木)の山中岩太郎宅の庭先に落下した重さ330gの石鉄隕石である。昭和12年(1937)、五藤光学社長で天文ファンの五藤斎三氏に買い取られ、同氏の所蔵となった。在所隕石は、日本でただ一つの石鉄隕石(パラサイト)である。

昭和56年(1981)3月、五藤斎三氏の寄付により、落下地点に「在所隕石落下地の碑」が建てられた。[13]、[14]、[15]

4. 愛媛県

(1)大法寺の天測記念碑(八幡浜市本町134、大法寺境内)

明治15年(1882)10月、海軍水路部によって大法寺境内で天文経緯度が測定され、八幡浜

港の海図を作成する基準点とされた。

この天測点の標石は、大法寺の石垣などの築造とそれに伴う境内の整備で滅失したが、本堂前には昭和55年(1980)に八幡浜史談会が建てた小さな天測記念碑がある。この記念碑には、当時の実測経緯度とこの天測の簡単な紹介とが記されている(図5)。[16]

5. 福岡県

(1)田中久重胸像(久留米市合川町、久留米百年公園リサーチセンタービル前/同市通外町、五穀神社境内)

田中久重(1799-1881)は、現在の久留米市生まれの発明家で、幕末から明治にかけて活躍した。別名“からくり儀右衛門”と呼ばれている。田中久重は数多くの発明をしているが、天文に関するものとしては、時計の上部に太陽・月の日周運動や季節による高度変化の模型を配した万年時計、仏教の須弥山説に基づいた一種のプラネタリウムとも言える視実等象儀などがあり、これらは国立科学博物館などに所蔵されている。

合川町の胸像は、昭和32年(1956)8月、久留米市篠山町に建立されたもので、久留米百



図5 大法寺の天測記念碑(佐藤利男氏撮影)

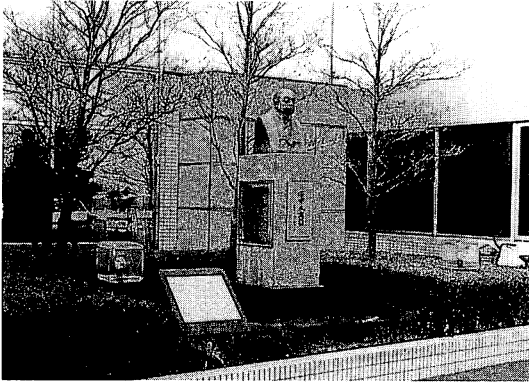


図6 久留米市百年公園の田中久重胸像

年公園の完成とともに現在地に移設された(図6)。

通外町とおりはかまちの胸像は、昭和51年(1976)4月、久留米市により建立されたものである。通町10丁目とおりまち(西鉄高架東)には、田中久重生誕地の碑もある。[17]、[18]

(2)漏刻台跡(太宰府市観世音寺4丁目、大宰府政庁跡)

「続日本紀」の宝亀5年(774)11月9日に、「大宰府と陸奥国は、同じように思いがけない危機を警戒している。ところが、大宰府には既



図7 太宰府の月山。太宰府政庁跡の北西側から撮影したもので、手前の平坦地は太宰府政庁跡である。合格祈願で有名な太宰府天満宮は、ここから2km北東にある。

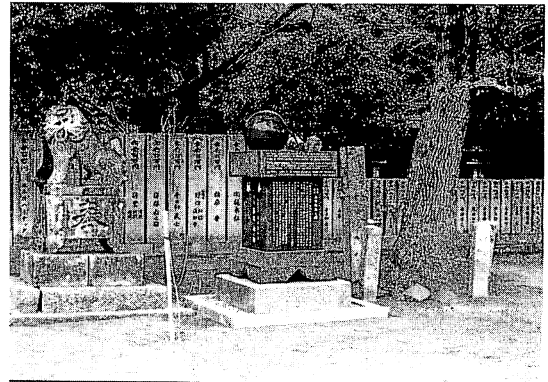


図8 直方隕石之碑

に漏刻があるが陸奥国には無い。」と記されていることから、当時、大宰府には漏刻が置かれていたと考えられる。

特別史跡大宰府政庁跡の東側に、比高20~30mほどの月山と呼ばれる丘があり(図7)、ここにかつて漏刻(水時計)が設置されていたと伝えられている。月山山頂は、ほぼ平坦地で現在は草木が繁茂している。月山の発掘調査は未だ行われておらず、現在のところ漏刻台に関する遺跡は見つかっていない。[19]、[20]、[21]

(3)直方隕石之碑(直方市下境、須賀神社境内)

直方隕石は貞観3年(861)に、現在の須賀神社付近に落下したと伝えられる472gの石質隕石で、落下記録がある世界最古の隕石である。昭和54年(1979)、地元ラジオ局の飛石伝説の放送から、北九州市の馬込武志氏が隕石の存在に気づき、国立科学博物館の村山定男氏に連絡し、隕石と確認された。

平成4年(1992)6月、直方隕石を記念して「直方隕石之碑」が境内に建立された(図8)。[22]、[23]、[24]

(4)福岡県内の伊能忠敬の測量記念碑(大牟田市/宗像郡玄海町/北九州市)

大牟田市栄町1丁目、五月橋そばに伊能忠敬測量之地の碑がある。伊能忠敬が大牟田地



図9 恵比須神社の方位石

方を測量したのは文化9年(1812)10月で、この碑は昭和45年(1970)12月、大牟田市伊能忠敬顕彰会により建てられた。

宗像郡玄海町神湊 1220、料理旅館「魚屋」前には、伊能忠敬宿泊跡の碑がある。この碑は伊能忠敬測量隊が、文化10年(1813)の第二次九州測量の際、博多から小倉への測量時に宿泊したことを記念したものである。

北九州市若松区浜町 1-2-37、若戸大橋の橋台近くの恵比須神社(蛭子神社)には、社伝に伊能忠敬奉納と記されている方位石がある(図9)。ただし、克明な記載で知られる伊能忠敬の日記には、恵比須神社に参拝したことや、方位石を奉納したことが書かれておらず、社伝の裏付けはない。この方位石は、高さ15cm、直径49cmの円盤状で、2段の台石の上に載り、恵比須神社社殿の脇に置かれている。この方位石そのものは、伊能忠敬との関連とは別に、北九州市の有形民俗文化財に指定されている。

北九州市門司区大里本町 2-9-17、遊亀氏宅前には、文化7年(1810)1月12日、伊能忠敬が測量時に宿泊したと測量日記に記されている大里宿本陣、重松彦の丞屋敷跡の碑がある。

北九州市小倉北区京町1丁目、長崎街道起点の常盤橋そばには、伊能忠敬測量200年記念碑がある。この碑は平成13年(2001)9月に、伊能忠敬測量200年を記念して建てられたも

のである。[25]、[26]、[27]

## 6. 大分県

### (1)伊能忠敬測量史跡(別府市楠町3-5先)

文化7年(1810)2月、伊能忠敬は現在の別府市付近の測量を行い、流川の道路に江戸日本橋より262里の里程標を建てたと言われる。その里程標は大正時代まで現存していたらしい。

昭和15年(1940)別府市により記念碑が建立され、その後、昭和46年(1971)、別府ライオンズクラブにより現在の高さ1.4mの鉄製標柱「伊能忠敬測量史跡」が再建された。この標柱の裏面には、前記の里程標のことが記されている。[28]

### (2)伊能勘解由忠敬測量遺跡(津久見市堅浦602、海岸寺)

海岸寺本堂そばに、高さ約2m、幅約25cmの石碑がある。この碑の由来を海岸寺由来記から推定すると、文化7年(1810)伊能忠敬の測量を記念して建立された碑という。

この碑には測量に従事した坂部貞兵衛などの名が刻まれているが、建立年月日などは記されていない。[29]

## 7. 長崎県

### (1)金星日面経過観測記念碑(長崎市西山町2-

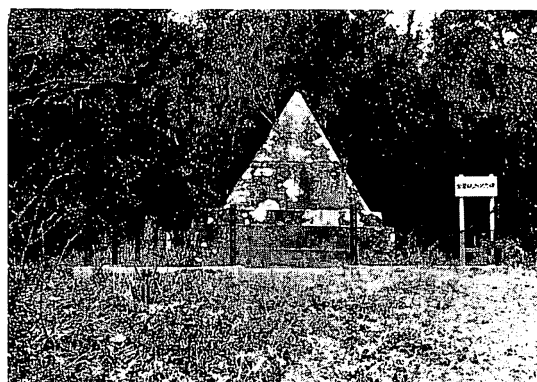


図10 金星日面経過観測記念碑

252、金刀比羅山)

明治7年(1874)12月9日の金星の日面経過は、日本付近が観測条件が良く、フランス、アメリカ、メキシコの観測隊が来日した。長崎ではアメリカとフランスが観測している。フランス隊は長崎市西山町の金刀比羅山で観測を行い、高さ約205cmのピラミッド型の観測記念碑を残した(図10)。

この碑の東約24mのところこに小さなレンガ造りの台が残されているが、これはフランス隊が子午儀を据え付けて観測地の位置を測定した観測台と考えられている。平成5年(1993)12月、長崎県大村市の原口孝昭氏らにより80年ぶりに再発見された。この観測台と前記の観測記念碑は、長崎県指定史跡として保存されている。金刀比羅山には平成9年(1997)に、長崎県測量設計業協会の創立20周年を記念して、わが国初の経緯度確定の地の碑も建てられたとのことである。

アメリカの観測隊(隊長ダビドソン)は、長崎市内の大平山(現・星取山)に布陣したが観測記念碑は残さなかった。ダビドソンは、ベルビューホテルの敷地内(現・長崎市南山手1-18、長崎東急ホテル付近)に、経度観測所を設置した。ベルビューホテル内には大北電信会社長崎局が開業しており、同局とウラジオストックを電信で繋いで、この地の経度を求めている。ここは国際電信の発祥の地でもあることから「国際電信発祥の地」と刻んだ石標が建てられている。[30]、[31]、[32]、[33]、[34]、[35]

(2)伊能忠敬天測之地の碑(福江市栄町、東公園内)

伊能忠敬は文化10年(1813)7月27日から8月24日まで、下五島地方を測量した。福江、黄島、大宝、玉之浦では天測も行っている。

この記念碑は福江市教育委員会により、昭和59年(1984)に建てられたもので、石を組んだ台上に「伊能忠敬天測之地」と刻まれた白



図11 天文館跡の碑

御影石の石板が設置してある。

福江市末広町642、宗念寺の墓地には、伊能忠敬の測量を補佐し、福江で亡くなった坂部貞兵衛の墓がある。[36]、[37]

8. 鹿児島県

(1)天文館跡(鹿児島市東千石町15-5)

鹿児島市の繁華街として知られる天文館通りの名前は、薩摩暦編纂の任にあたった天文館が建てられていたことに由来する。天文館は明時館ともいい、安永8年(1779)島津家第25代、薩摩藩主島津重豪が建てたもので、ここで天体観測、暦の編纂などが行われていた。天文館内には高さ4m余りの露台があり、その上に観測器械を置いて、暦の編纂などに必要な天体観測が行われたと伝えられている。

天文館のあった場所は、現在の天文館通りの明視堂眼鏡店付近にあたり、ここに高さ120cmほどの天文館跡の碑が建てられている(図11)。[38]

(2)伊能の碑(熊本郡上屋久町宮之浦、町役場そば)

平成12年(2000)に、上屋久町により建立さ

れた高さ約170cmの石造りの碑である。この年は伊能忠敬が全国測量を開始して200年目にあたり、全国規模のウォークラリー（伊能ウォーク）が実施されている。上屋久町の碑は、伊能ウォークが同町を訪れた6月24日に除幕式が行われた。

## 9. おわりに

中国地方編と同様に参考文献については正確を期したつもりだが、20年近くにわたる調査の間に出典のメモを逸したものもある。この点は御容赦をいただきたい。また、参考文献の原文をほぼそのまま引用させていただいた箇所もある。高知市の岡村啓一郎氏には、高知県の史跡について私信でも教え受けた。あわせてお礼を申し上げる。

## 参考文献

- [1]北尾浩一, 2001, 「沖繩一星とのあゆみの跡をたずねて」, 天文教育, Vol.13, No.4, 27-29
- [2]中村士, 澤田平, 長谷川桂子, 2000, 「江戸時代の天文・測量における精密測定系の系譜：久米通賢の天文測量器具とバーニア副尺」日本科学史学会2000年5月年会予稿集
- [3]山岡光治, 2000, 「地図測量史跡を巡る」, 54-55, 株式会社リプロ（岡山市）
- [4]国分寺町編, 1988, 「国分寺隕石」, 香川県国分寺町
- [5]村山定男, 1989, 「天文おりおりの記」, 220-234, 星の手帖社（東京都渋谷区）
- [6]橋本万平, 1966, 「日本の時刻制度」, 211, 塙書房（東京都文京区）
- [7]岡村啓一郎, 1995, 「土佐天文散歩」, 16-20, 高知新聞社（高知市）
- [8]岡村啓一郎, 1988, 「土佐の暦学者たち」, 103-122, 土佐出版社（高知市）
- [9]岡村啓一郎, 2000, 「片岡直次郎資料集」, 自費出版（高知市）
- [10]文献[7], 54-65
- [11]文献[8], 72-76
- [12]文献[7], 46-53
- [13]五藤斎三, 1979, 「天文夜話」, 104-107, 自費出版（東京都世田谷区）
- [14]文献[7], 113-121
- [15]関勉, 1973, 「夜空を翔ける虹」, 142-147, 三恵書房（東京都千代田区）
- [16]東京天文台編, 1933, 「昭和9年暦」, 52, 神宮神部署
- [17]伊東俊太郎ほか編, 1983, 科学史技術史事典, 図版ページ, 弘文堂（東京都千代田区）
- [18]小田幸子, 佐々木勝浩監修, 1981, 図録和時計, (財)科学博物館後援会(東京都台東区)
- [19]文献[6], 37-82
- [20]宇治谷孟, 2000, 続日本紀（下）全現代語訳, 講談社学術文庫1032, 134, 講談社（東京都文京区）
- [21]九州歴史資料館編, 1998, 大宰府復元（大宰府史跡発掘30周年記念特別展図録）, 55ほか, 九州歴史資料館（福岡県太宰府市）
- [22]島正子, 村山定男, 1992, 「本邦に落下、回収された隕石研究の推移」, 国立科学博物館研究報告, E類, Vol.15, 25-52
- [23]直方市広報課, 1979, 「直方むかし第85話 須賀神社の飛石」, 市報のおがた, 昭和54年4月号, 直方市
- [24]直方市広報課, 1980, 「直方むかし第95話 直方イン石」, 市報のおがた, 昭和55年2月号, 直方市
- [25]西川治, 1988, 「伊能忠敬の顕彰史再考－伊能図の地磁気の人脈－」, 東京地学協会編「伊能図に学ぶ」, 198, 朝倉書店（東京都新宿区）
- [26]山岡光治, 1996, 「訪ねてみたい地図測量史跡」, 116, 古今書院（東京都千代田区）
- [27]原田種純, 今永正樹編, 1976, 「伊能忠敬測量日記」, 福岡・大分・宮崎県の部, 2-3, 九州ふるさと文献刊行会（大分県中津市）
- [28]文献[26], 121
- [29]文献[26], 122

- [30]森保茂ほか, 1974, 「金星過日」, 金星の日面経過観測記念碑設立期成会 (神奈川県厚木市)
- [31]原口孝昭, 1999, 「明治7年の金星日面経過観測」, 平成10年度文部省科学研究費補助金奨励研究 (B) 報告書
- [32]原口孝昭, 1995, 「長崎の金星日面経過観測碑—観測台の再発見—」, 天文月報, Vol.88, No.2, 73-78
- [33]田代庄三郎, 1916, 「長崎金刀比羅山金星経過観測記念碑」c天文月報, Vol.8, No.12, 141-143
- [34]齊藤国治, 1974, 「科学における黒100年前の金星日面経過観測」, 天文月報, Vol.67, No.2, 50-55
- [35]武石信之, 1999, 「長崎電信局にあった『経度測所』」, 天界, Vol.80, No.6, 326-332
- [36]文献[25], 195-197
- [37]文献[26], 120
- [38]唐鎌祐祥, 1992, 「天文館の歴史」, 42-50, 春苑堂出版 (鹿児島市)

プラネタリウム番組企画・制作・装填  
博物館展示物・ホームページ制作  
LAN・インターネットサーバーの構築  
天体写真の著作権販売

その他、みなさまのニーズにお答えします

大阪本社  
〒550-0042  
大阪市西区立売堀1-7-8 井本ビル 3F  
Tel:06-6536-5012  
Fax:06-6578-0109

東京オフィス  
〒101-0041  
東京都千代田区神田須田町1-2 カルフル神田 3F  
Tel:03-3253-1776  
Fax:03-3256-2406

ホームページURL  
<http://www.ihatove.co.jp/>

株式会社イーハトーヴ

Please Call Now!